



日本語の 歴史

3
中世口語
資料を読む

柳田征司

Yanagida Seiji

武蔵野書院

はじめに

日本語の歴史を知るためには、資料を丁寧に読み、それが語りかけて来ることに耳を傾けなくてはならない。そのことが基本であると私は考えて来た。

私たちの先学は資料を語学的に読むということにおいて優れた成果を蓄積してくれている。例えば日本古典文学大系の『今昔物語集』、この書が掬い上げた言語事象の数々は実に魅力的である。現代西九州方言の形容詞文で聞かれるカ語法、

スズノ ジョーリユー スットジャ ナカト？（錫の蒸留するのではないの。）（鹿児島市方言）
のような例をこの資料に掘り起こした一事をとつても私には大きな驚きであった。

寂照「耻ジヤクセツ」思オモヒ 気色ケシキ 无ムテシ「穴アナ貴ケイ」ト云イヒテ、持来モチキタル 饌シマヘモノ 吉食クツケ 返ヘリニケ（卷一九〇、東大本甲） 実践本・国学院本「耻ジヤクセツシヤ」、東大本乙「耻ジヤクセツシテ」、内閣本B「耻ジヤクセツヌ」、同A・C本「耻ジヤクセツメ」

（現代語訳）寂照は「耻ジヤクセツずかしいことだ。」と思オモヒっている様子もなく、「ああ、ありがたい。」と言イハって、出された食事をすっかり食べて帰カエって行った。

「カ」を「ヤ」の誤写と見、異本の本文を採ヒキって、「耻ジヤクセツシヤ」と読んでしまいやすいところである。それで十分文意が通り、むしろその方が自然である。それにもかかわらず、いくつかの手続きを経

て、院政期の京都の言葉にカ語法が存したことを明らかにしてみせた。

資料にどのように耳を傾けるかは、読む資料と目的によって異なる。本書は、中世後期の口語資料、抄物（しょうもの）を読む。抄物というのは、漢籍、仏書、漢文体の国書を注釈した書物で、講義の聞書としてはじまったので口語体のものが多く、話し言葉を知る資料として価値が高い。その中から京都五山禅僧、惟高妙安（いこうみょうあん）（一四八〇～一五六七）が八〇歳を過ぎてから注釈した『詩学大成抄』（米沢図書館・岩瀬文庫蔵）と『玉塵』（国会図書館・叡山文庫・東大国語研究室（二本）蔵）を取り上げる。元代に刊行された類書、毛直方撰『詩学大成』、陰時夫編『韻府群玉』を注釈したものである。次に読む目的であるが、本書は、日本語の歴史を説明することを先の目標として向こうの方に見定め、一々の言語事象が日本語の歴史の中でどのような位置にあるのかについて考えようとする。例えばカ語法であったならば、現代方言に分布する形容詞文の三つの型、イ語法・カ語法・サ語法がどのように分岐して方言上に分布して行ったのかについて考えなくてはならない。

イ語法 スカイツリーワ タカイネ。（東京方言）

サ語法 アリガル タカサル。（彼が高い。）（那覇方言）

イ語法は共通語をはじめとする多くの現代方言で行われているもので、連体形終止の一般化によって終止法を果たすようになった「高キ」がイ音便を起こしたものである。「タカサル」は「タカサ+アル」。サ語法は、現代沖縄方言で盛んに行われており、次のような文に源をもつ。

あまり言葉のかけたさに、あれ、見さいなう、空行く雲の速さよ。（『閑吟集』235）

（現代語訳）あまりに言葉がかけたくて、「あれ見てご覧なさい。空行く雲のなんと速いこと。」先ず、三つの語法がかつてどのように役割分担をして存立していたのかを明らかにしなくてはならない。「ナイ」「タカイ」が「ネー」、「タケー」に転化し、語幹「ナ」「タカ」を維持できなくなる方言は、恐らくこれを避けてカ語法・サ語法を選ぼうとしたのである。それではカ語法とサ語法の方言を分けたものは何だったのか。そして、カ語法について言えば、大小と多少とを区別するために「多おほ」がカリ活用をしていたことは知られているところであるけれども、カリ活用はどのようにして他の形容詞や形容動詞（賑ヤカカ・元気カなど）にまで広がって行ったのか。説明しなくてはならないことは多い。このように考えて行くことによつて、日本語の歴史を、方言を含めて総体として動的に説明したいというのが私の考えである。本書で取り上げた言語事象のいくつかは後に書かれる巻において統合的視点からその位置を与えられるはずである。

そのような意図のもとに書いたので、点在する数少ない星から星座を描きでもするかのように推論を重ねた。或いは推論が過ぎたところもあるかも知れない。しかし、私が恐れるのは、むしろ今の自分が大きく推論するだけの活力を持ち、それを発揮できているかということの方である。

目次

はじめに 3

一 花ノ影踏ムコトナカレ秩父山、車ヲ回ス母ニ勝ツ里

1 本文・語釈 12

2 注目される言語事象——花ノ影踏ムコトナカレ秩父山 車ヲ返ス母ニ勝ツ里

車ヲ返ス母ニ勝ツ里 15／禁止表現「コトナカレ」 17／五山僧、原古志稽と『論語』の講義 21／五山僧と博士家の交流 24／花の影を踏む 26

3 その他の言語事象

a ノドガカワイテ渴シタレドモ 27／ b 俗人ノヨリヤウテ 29／ c 名譽ノ句 36

二 相

1 本文・語釈 38

2 注目される言語事象——相トヨムナリ。キヲナガウヒイテヨム

「相」字の二つの訓み方 43／「キウリ」（胡瓜）と「キユウリ」 46／動詞の語幹末から

活用語尾にかけて生じた〈―イ〉、また上二・上二段活用動詞＋助動詞「ウ」に生じ

た〈―イ〉 47／複合名詞・複合動詞の接合部に認められる母音連続〈―イ〉 49／漢

字音・外来語に認められる母音連続〈―イ〉 50

3 その他の言語事象

a キル物 51／ b シモク 53／ c フレヲナイテ 57／ d ヲンドヲトリテ 60／ e 辛

労サニ 64／ f アテノ石 67／ g サヌミ 68

三 北兵左

1 本文・語釈 70

2 注目される言語事象——北兵左

「来來」から「棗」を言い当てる 75／北兵左 76／『百物語』へ 78／聖道 80／漢字を用いた謎かけ 82

3 その他の言語事象

a ラエ出タ 84／ b タ、ウデ 85

四 春ノ日

1 本文・語釈 88

- 2 注目される言語事象——春ノ日
永阿弥 92 / クレサウデクレヌ 93 / 卑俗さと活力 95 / 嚴維「酬劉員外見寄」 96
- 3 その他の言語事象
a 花ノサイテアル鳩 99 / b クル、ヤナゾ 101 / c 妙善院殿ヲバ 109

五 一休布施ノ少ナイコトヲ言ウ

- 1 本文・語釈 112
- 2 注目される言語事象——「屋形ヨリ老僧ニタマワル御布施ニハマチトスクナウサウラウ」¹¹⁹
- 3 その他の言語事象
a フクリウシテ 122 / b 名人ナレバコソ云タレゾ 128

六 末ノテニハヲ低ウ音ヲ消シテ低ウ言ウ

- 1 本文・語釈 136
- 2 注目される言語事象——スエノテニハヲヒクウ音ヲケシテヒクウ云 140
- 3 その他の言語事象
a コウベツタ 141 / b 心ユル 146 / c ヲモワセウドテ 150

七 水ヲ飲ミ知ル

- 1 本文・語釈 154
- 2 注目される言語事象——陸羽ガ、揚子江ニ、南零北零中零ト三所ノ名水アリ、揚子ノ中零ノ水ラクミニヤツタゾ 157

八 梅ヲ嗅ゲ

- 1 本文・語釈 162
- 2 注目される言語事象——梅ヲ嗅ゲ
悲嘆に暮れて梅を嗅いだ人たち 164 / 『万葉集』の梅を詠んだ歌 167
- 3 その他の言語事象
a 日本ビタレドモ 169 / b ジャレ句ジャレタ詩 171

九 支那湖ノ荷香

- 1 本文・語釈 184
- 2 注目される言語事象——香ガ…キコユル 186

一〇 東沼和尚ノ羽化

1	本文・語釈	190
2	注目される言語事象——羽化	196
3	その他の言語事象	
a	飛アルク	199
	おわりに	202
	あとがき	206